日本鉄鋼協会記事

編集委員会

第11回和文会誌分科会　開催日: 1月13日. 出席者: 長嶋主査, ほか20名.

1. 19件の論文審査報告がなされ, 修正依頼3件, 掲載決定14件であつた.
2. 「鉄と鋼」第64年第6号(5月号)に論文14件技術資料1件掲載決定した.

第11回欧文会誌分科会　開催日: 1月17日. 出席者: 荒木幹事, ほか8名.

1. 9件の論文につき審査報告がなされ, 掲載可2件照会後掲載可3件, 修正依頼3件, 掲載不適当1件であつた.
2. 「鉄と鋼」64年1号より1件の研究論文と1件のSpeciel Lecture, 64年5号アブストラクトより4件の研究論文を勧誘することとなつた.

共同研究会

第2回運営委員会　開催日: 12月13日. 出席者: 小林会長, ほか26名.

11月に行われた共同研究会総務幹事会の議事報告を中心に運営委員会が開催された. 議事は,

1. 総務幹事会議事報告
2. 共研52年度予算使用実績報告
3. 共研53年度予算案審議
4. 圧延に関する国際会議について
5. 鉄鋼技術情報センター設立について
6. 部会活動について

の6項目について進められた.

部会活動のうち, 懸案の懇親会費について会費は値上げせず懇親会そのものを質素に運営することとなつた.

鉄鋼技術情報センター (53年4月日本ビル別館内に設置予定) については, 三井参与より設立趣旨, 内容, 予算計画等の説明が行われた.

電気炉部会

第10回第1分科会　開催日: 12月15～16日. 出席者: 池見部会長, 山木主査, ほか49名.

1. 開催場所　トピー工業豊橋製造所
   豊橋商工会議所
2. 特別講演
   「炉外精錬について—日本の現状の Review—」と題して新日鉄・桑原氏から講演を行つていただいた.
3. 研究発表

3-1 製鋼工場の安全管理と対策
災害事例についての原因調査, 対策, および安全管理体制, 作業改善例などを主として10件の研究発表があり, 活発な質疑応答が行われた.

3-2 連続鋳造の操業および品質
品質向上に関する改善, および多連鋳化を主として5件の研究発表があり, 活発な質疑応答が行われた.

4. 工場見学　トピー工業豊橋製造所の見学を行つた.

圧延理論部会

第59回部会　開催日: 12月1～2日: 出席者: 岡本部会長. ほか85名.

開催地: 日本鋼管本社, 京浜

第59回部会では次の25件の発表があつた.

(1) 条鋼圧延に関するもの……5件
(2) 鋼管圧延に関するもの……3件
(3) 鋼板圧延に関するもの……7件
(4) 潤滑理論に関するもの……5件
(5) その他……5件

発表の件数が多かつたこと, 及び熱心な討議のため時間が不足気味であつた.

なお, 工場見学として, 第1日目に日本鋼管京浜製鉄所の見学を行つた.

標準化委員会

ISO鉄鋼部会

第12回SC15分科会　開催日: 12月23日. 出席者: 山南主査, ほか15名.

1. 継目板 (94F)

前回会議で日本意見が取り入れられており特に問題とする点がなかつた.

2. ベースプレート (91E)

厚さ, 幅, リップ, 穴の位置などの許容差などが日本の実状と相違するためJIS及びJRSをベースに日本コメント案を作成した.

3. 鋼製枕木 (90E)

厚板を加工した枕木の製造実績があるためこれらも規格に含めるよう提案することにした.

4. 非熱処理平板レール (DIS 5003)

引張試験片採取位置, 落重試験条件など部分的に相違する点はあるが, 全般的には特に問題とする点もないので原案に賛成することにした.

第59回鋼管分科会　開催日: 12月20日. 出席者: 丸岡主査, ほか15名.

1. JIS鋼管原案作成分科会での宿題事項の検討
   a. STBの熱処理に完全焼なましの追加
   b. STB 33の存続
   c. SUS-TPの14B以上に周長公差の新設
   d. STPYの周長公差適用の可否
   e. SGPの水圧試験とNDIとの対応データーについて

クリープ委員会

第10回高温熱疲労試験分科会　開催日: 12月23日. 出席者: 雑賀主査, ほか13名.

1. 高温低サイクル疲労共通試験結果の報告が次の順序で行われた.

(1) 一般材料試験結果について　高温引張試験（新日鉄），クリープラプチャー試験（鋼管）およびシャルピー衝撃試験（千代田化工）の順に.

(2) 高温低サイクル疲労試験結果について　追加を含め日新，神鋼，三菱金属，大同，石播，川重工の順に.

2. ついで前回までの中間報告の取りまとめ結果が，また，クリープ損傷の計算方法および結果の1部がそれぞれ2名の幹事より報告があり討議が行われた.

3. 共通試験結果総合報告書の取まとめに関する素案が幹事より説明がなされ，各項目毎に分担が割当てられこれらメンバーによりW・Gを組織し上記報告書の編集に当ることが了承された.

日本学術会議第74回総会報告

第 11 期の最初の総会に当たる第 74 回総会は，1月 23～25 日の3日間，日本学術会議講堂で開かれた.

総会は，規定に従い事務局長の議長代行のもとに開会され，まず沖縄県在住の科学者の代表として琉球大学法文学部教授米須与文氏および琉球大学農学部教授赤司景氏がオブザーバーとして参加されている旨の紹介がなされた.

ついで会長選出に移つたが，会員から従来の方法では判断の資料が不足しているのでいつたん休憩し，部会を開催して候補者についての情報の交換をしてはどうかとの意見が出され，これについて活発な議論が行われたが，結局従来の方法で行うことになつた.

投票の結果，会長に伏見康治会員（第4部）が選ばれた.

就任の挨拶に立つた伏見新会長は，(1)全会員の英知を結集するため総会主義を貫く，(2)重点的に問題をしぼつて審議を行う，(3)当面の仕事に追われて本質的な問題を見失なうようなことはしない，(4)国際的な学術交流・協力にかかわる活動の強化，とりわけ発展途上国とのそれに重点を置く，など学術会議の今後の活動について会長としての抱負を述べた.

ついで，伏見会長が議長席につき副会長の選挙に入り，人文科学部門から岡倉古志郎会員(第2部)，自然科学部門から名取礼二会員（第7部）が選出され，両副会長からも挨拶があり，第1日目の日程を終えた.

午後の各部会では，部長，副部長，幹事の選出等が行われた.

総会第2日目には，まず，越智勇一前会長が第 10 期の総括的な報告を行つた後，引き続いての退任の挨拶の中で我国の科学の発展にとつて本会議の果すべき役割の重要さを強調した.

ついで運営審議会付置小委員会の活動報告が行われた．特に高橋前副会長（財務委員会委員長）からは，本会議の予算の現状について詳細な説明があつた．また伏見前会長によるＩＣＳＵ小委員会の報告では 1979 年に開催されるＵＮＣＳＴＥＤ（国連開発のための科学・技術会議）にどう対処すべきかという問題提起があつた．この後，各部，各委員会等から第 10 期の活動のまとめや第 11 期への引継ぎ事項に関する詳細な報告があつた.

諸報告の終了後，短時間ではあつたが第 11 期の活動計画を策定するための手続き等について自由な討論を行つた．討論は期の最初の総会にふさわしく，終始活発な質疑応答が行われ，予定を延長して午後6時すぎに終了した.

総会第3日目には，「第 11 期の活動に関する基本計画の策定並びにそれに伴う各種委員会の当面の措置について(申合せ)」についての審議が行われた．本議案は，第 11 期の本会議の基本的な活動計画を策定するため，4月総会までの3か月間，いかにして全会員が英知を結集して審議を行うか，ということに関する内容のものである．そこでこの議案については，岡倉副会長からきわめて詳細な提案趣旨の説明があり，慎重審議の上，第 11 期活動計画委員会を設置することを主要内容とするこの提案を全会一致で採択した.

この委員会は(ア)会長および副会長，(イ)各部の役員の中から選ばれた者各1名，(ウ)各部の会員の中から選ばれた者各3名（新会員1名以上を含む）で構成するものとし，また各部にもこれに対応する小委員会を設け緊密な連絡をとりながら作業を進めることとなった.

このため第 75 回総会までは，国際協力事業特別委員会を除く特別委員会はもちろん，常置委員会も発足しないことになつたので，この期間における臨時の措置として，常置委員会が継続して作業する必要がある場合および第10期に設置された特別委員会が緊急に残務を処理する必要が生じた場合には，会長が第 10 期の委員だつた現会長およびその他の会員をもつて構成される臨時委員会を召集する等の手段によつて処理することが決められた.

さらに「科学技術会議日本学術会議連絡部会専門委員の推薦について」の議題が提案され，これについては両副会長及び各部より1名ずつを選出し推薦することとした．ついで，(1)地方区世話人を各地方区選分会員の協議によつて選出すること，(2)日本学術会議選挙管理会委員候補者の推薦を行うこと，および第 75 回総会の日程を決めた.

議事終了後，伏見議長から，第 11 期の日本学術会議の出発に当つて，日本学術会議のあり方等について会員が自由に意見を述べるよう求めたのに対して，短時間ではあつたが活発な意見が表明された後，総会を終了した.

なお，今総会の出席率は第1日目から第3日目まで，それぞれ 96%，94%，95% であつた.